

「二千二十二年秋」

四組 今道周雄

● 藁を焼く煙棚引き秋は来ぬ足柄の野は平和なりけり
世界を見渡せばウクライナの戦争、パキスタンの大洪水、ソマリアの飢饉、ハリケーンによるフロリダ州の大被害など、枚挙にいとまがないほど災に見舞われている。それに比べるとありがたいことに足柄の野は平穩無事である。

● 百舌の声鋭く響き急き立てる夏の衣を早よ仕舞えと
連日三十度近くあった気温が十月五日午後から急に下がり、十一月下旬並みとなった。近くの木に止まった百舌が激しく鳴きたてる声があたかも衣更えを促している様に聞こえる。

● 秋雨に烟る稲穂は頭こっぺたれ刈り取りの日を待ち望みたり
昨日までの暑さが嘘の様に、冷たい雨に変わって実った稲穂をぬらす。できれば快晴の空のもとで稲刈りをやりたいものだ。

● 秋の日の国際線には様々に装い凝らす旅人の群れ
仕事で訪れた羽田空港国際線ターミナルには夏服も冬服もいり乱れていた。それぞれが向かう先に合わせて服装を用意したのだろう。

● 足繁く通いし時は近かりしカリフォルニアの空蒼かりき
一時は月に一度必ず行っていたカリフォルニアは、随分遠くなっていました。カリフォルニアの青い空をみると全ての困難が解決できる様な気がしていたのに。